

助手 「博士、その机の上で転がってるの何ですか」
博士 「卵。鶏の」
助手 「それは見ればわかりますけど、何で自力で活発に転がってるんですか」
博士 「ゾンビにしてみましたから」
助手 「卵を？」
博士 「卵を」
助手 「何の役にたつんです？」
博士 「あっあっ割れたら死んじやう」

助手 「忘れな草？」
博士 「忘れな草。これは」
助手 「あー説明しなくていいです。想像つきません。博士の発明品はいつもろくでもないんです」
博士 「何でこれ作っただんだけ？」
助手 「忘れるな！」
博士 「忘れな草「ワズシルター！」
助手 「鳴くんですかこの花！」
博士 「うん」

助手 「博士大変です！ 宇宙人が地球に攻めて来ました！」
博士 「大丈夫、こんなこともあろうかと僕のクローンを作っておいたよ」
助手 「博士が1ダースいて何になるんですかー！」
博士 「大丈夫、君も1ダース作ってあるから」
助手 「な」
博士 「皆で防衛会議しようかー」

助手 「博士、珍しく何を考え込んでるんですか」
博士 「実は、すごくリアルな夢を見られる機械を作ったんだけど」
助手 「はあ」
博士 「いまコシドンちかなあ？」
助手 「えっ」
博士 「ちなみに助手君の枕元にも設置していいから」
助手 「えっ」
博士 「いまコシドンちかなあ」

博士 「今度は何作ってるんですか」
助手 「うどんぎつね」
博士 「は？」
助手 「うどんぎつね」
博士 「……ぎつねうどんじゃなく？」
助手 「うん。ほら」
博士 「何これ可愛い！ 熱い！ 白い！ 可愛い！」
助手 「モフっていいよ」
博士 「可愛い！ 熱い！ 可愛い！」

助手 「豚に真珠？」
博士 「豚の真珠」
助手 「豚の」
博士 「豚の体内で真珠を養殖できるようにしたんだよ」
助手 「研究室で豚を飼わないでください、何頭いるんですか」
豚 「ブー」 豚 「ブー」
豚 「ブー」 豚 「ブー」
助手 「あとあまり売れない気がします」

博士 「ハッピーバースデー助手君！」
助手 「えっ、僕、僕、今日誕生日でしたっけ」
博士 「そうだよ。ほらこの研究日誌」
助手 「なんで研究日誌に僕の誕生日が書いてあるんですか」
博士 「君を製造してから予算上がったよねー」
助手 「はい？」
博士 「ケーキ買ってきたよー」

博士 「助手君、風邪どう？ お粥作ったよ」
助手 「……喋るお粥ですか」
博士 「喋らないよ？」
助手 「飛ぶとか」
博士 「飛ばないよ？」
助手 「爆発」
博士 「しないよ？」
助手 「普通に食べるお粥作ってくれたんですよ」
博士 「食べれないお粥だよ？」
助手 「どんなに！」

博士 「今度は死体判別機作った」
助手 A 「死体から離れる気ないんですか」
博士 「原型のない死体でも、誰の死体か一発で判別するよ」
助手 A 「何の役に立つんです？」
博士 「死体にこれに向けて……ホラやっぱり助手Bだ」
助手 A 「それは冷蔵庫に戻して、先に犯人探さ機械作って下さい」

「博士、今度は何を作ってるんですか」
博士 「作るというか育ててる。ほら」
助手 「水槽の中の……何ですコレ」
博士 「しらたき」
助手 「しらたき」
博士 「確かにしらたきですが」
助手 「人工生殖に成功したよ」
博士 「しらたきの？」
助手 「しらたきの」

博士 「今度は死体製造機作った」
助手 A 「それ普通に殺人兵器ですよ」
博士 「いや、殺さないよ。無から死体を作るよ」
助手 A 「何の役にたつんです？ いろいろ生き物を作ってくださいよ」
博士 「それもやっただい」
助手 A 「いつやっただいんですか!？」
博士 「君が生まれたとき」

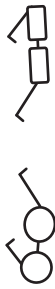
「死体探知機作った」
助手 A 「何の役にたつんです？」
博士 「冷蔵庫に向けてたらビービー鳴るんだけど」
助手 A 「そりゃそうですね」
博士 「人間の死体にはか反応しない筈なんだけど」
助手 A 「失敗作なんじゃやないですか」
博士 「ところで君が助手AってことはBはどこにいますか？」

助手が博士で博士が助手で

twonovel おりほん

5

～博士と助手編～



この内容は、suwazoが2010年2月～2013年6月にかけてtwitterで殴いたtwonovel（※140文字、ただしタグを除けば131文字の小説）のうち、11本に、新作を1本加えたものです。

suwazo@twitter
2013年6月

石階段ともに落ちゆく博士と助手
助手が博士で博士が助手で